

vol. 1



小暮朱

中山俊一

COTENTS

月々短歌 p2

連作

「四組軍団」中山俊一 p4

「きんこんかんこん」小暮朱 p14

しりとり短歌 p23

著者情報 p25

月々短歌

チョコレイトが溶けない季節だからって愛の欠片を手放してみる

足らないの君を抱く間が守る間が春の陽にみつかってしまふ、あ

四組軍団

中山俊一

あやとりの完成形を解きゆき少女は大人の顔で笑った

辻さんは飼育係を休みがち午後4時過ぎには夕日が出がち

私いま体育館にて擦りおいた傷口のような恋をしました

生意気な君が好きだよ愛してる袖に隠れたハンコ注射よ

くもり空ナイキのマークが宙に浮くあす晴れるまで飛ばされる靴

さわぐ声静まる教室鍵盤をおどる指先シヨパンの調べ

初々しいミスを両手に抱え込み昇華させた美術の先生

黙祷の中で目が合い笑い合う一つの平和な形があった

夏の庭ホースで虹を架けるととき芝生は一部ビショビショになる

純粹で透明なものを探す子は水面に浮かぶ顔に気付かぬ

文化祭だれも望んじやいないけどあの夜ぼくは不死鳥だった

あの学級文庫の近い窓際に座りたかった秋の席替え

どちらにも丸を付け出す先生が俺は憎くて仕方なかった

白線の上を歩くは少年の規則の憧れ自由は飽きた

腕捲りアンチ巨人の華奢な筋 夏の逃げ水だったあの人

死んでくれサクラクレパス16色その一本が選べないのだ

汚いけど精一杯の【青空】が広がっていた後ろの方で

きんこんかんこん

小暮朱

まどみちお書き写してく黒板の上でイエスが磔の朝

左手の指が折れてもキリストの手を離さないヨゼフの像よ

意地悪なあの子階段踏み外しあの日確かにかみさまはいた

校庭にべたありつけてた掌を舐めさせられる夏が綻ぶ

おすましな顔して鋭い入射角音楽ノートを覗くゆかちゃん

牛乳の満ちるコップに浮く埃掬うことすら許されぬ昼

賢さと無知と縮れ毛三つ編みは揺れるあの子が問いを読むたび

まっさらな廊下をかけるあと二分、大人も子供も殺せた二分

「かみさまと結婚したの」シスターの銀色指輪と赤らんだ頬

体育館潜伏中の泥棒が時効を知ったきんこんかんこん

こんなにもこんなにも只眺めたの紅白帽の群れこんなにも

約束をしました忘れちゃいやよってやっつの私と二十歳のわたし

ささくれた朝礼台によじ登る神様おんなは汚いという

「また明日」 翻る紺のその中に白い手首と赤い五線譜

教室はよのはてでしたね紅ひいた口の「なつかし」どうか許して

しりとり
短歌

DATE

2月

TITLE

しりとり短歌

小暮

しりとりの[りんご]と[みかん]は手をとって逃げたよ五十音の外側

中山

五十音の外側にある思い出だ言葉以前のお前に会いたい

小暮


会いたいを転がす口から吐く息で新宿だって消えりゃあいいのに

中山

いいのにさ意地も虚勢も帆も張って海原へ出る男の背中

トルコの飴玉 vol.1


発行日 平成 27 年 2月15日

 Turkish_candy_



短歌

中山 俊一

 poseidon_29

小暮 朱

 lululu114

写真/デザイン

吉田幸之助

 ysdkns